

親は実態をどこまで知っているのか？ 急がれる情報モラル教育

前章では、子どもとインターネット、携帯電話をめぐる環境がいかに悪化しているかを見てきた。しかし、その実態を親はどこまで知っているのだろうか。親と子、先生の情報モラル教育が急がれる。

親

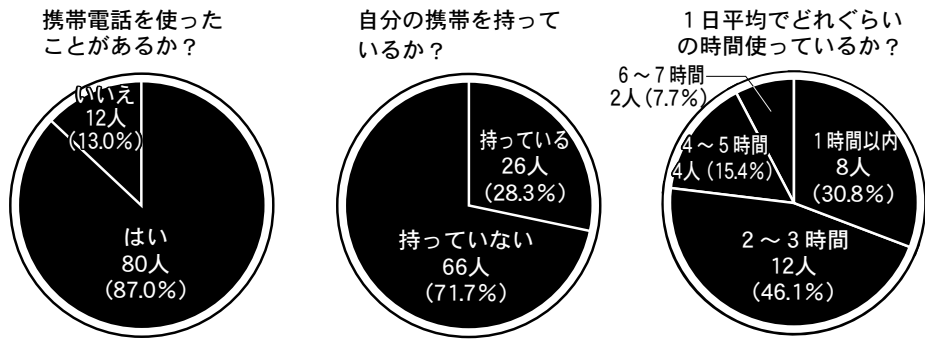
の世代のメディアとの接し方は受信が中心だった。電話で情報を送信できても、知らないもの同士とながったり、世界中に情報を発信するという発想はなかった。ネットももっぱら情報収集として理解している大人がほとんどだろう。ところが、今の子どもは違う。ネットとは発信を中心としたメディアとして接しているのだ。

これが「負」の方向で使われると厄介だ。その最たるものが「ネットいじめ」である。信頼していた友達からいきなり「ウザイ」「死ね」というメールが届く。面と向かって言われれば、その状況から本気か、冗談か判断できるが、突然では心に受けるキズがまったく異なる。逃げ場がないし、制御のしようもない。

子どもたちは好奇心とその場のノリだけで、特に深くも考えずに行動しているのだろう。しかし、ネットに掲載した情報は簡単には消せない。劣化することなく転送・再掲載

8割以上が「使ったことがある」

普代中学生の携帯電話の利用状況



※調査対象は普代中1年～3年までの男女92人



普代中学校で行われた情報モラル教室。情報社会に必要な判断力や態度を養い安全な利用法などを学習した

普中学生の約9割が 携帯を使ったことがある

問題はどうした実態や現状を親や先生たちがどこまで把握・認識しているか、である。

県警が昨年12月に行った中高生（中学校2372人、高校生2310人が回答）を対象にしたアンケート調査がある。携帯電話を持つ中学生の割合は29%、高校生になると

96%にはね上がる。

「出会い系サイトにアクセス（閲覧）したことがある」中学生は2%にあたる41人、高校生は5%の111人だった。このうち実際に「サイトで知り合った異性」に会ったのは中学生が10人、高校生が24人という結果が出ている。

昨年12月、普代中学校（木村利光校長、生徒97人）でも1年から3年生までの92人を対象に携帯電話に関するアンケート調査を行った。（上クワラ参照）

携帯電話を使ったことがある中学生は80人と、全体の87%を占め、28%の26人が自分の携帯電話を持っていると答えている。1日の平均利用時間は2～3時間が一番多く12人、6～7時間は2人もいた。最高時間は1日16時間だった。

そんな状況の中、昨年11月29日と、12月18日の2回同校で県警本部少年巡回指導員の千葉義晴さんを迎え情報モラル教室が行われた。

12月の講演会には小中学生の保護者や先生ら45人が参加。ネット犯罪被害に詳しい千葉さんは「携帯電話による事件事故が頻繁に起こっている。子どもたちをこの危機から救うのは親の義務でもあると思う。実態を知って親子でルールなど決めてほしい」と訴えている。

フィルタリングを設定し 有害情報をシャットアウト

有害情報から子どもたちを守る方法に「フィルタリングサービス」がある。同サービスを利用すると、出会い系サイトなどの有害サービスにアクセスしたり、「人の殺し方」と書かれているようなページを見ることができなくなる。費用は無料で、契約途中でも加入できる。

携帯電話会社各社も2月から未成年者が有害サイトを見ることを制限するフィルタリング機能の強化に取り組み始めた。気になるのは、前ページで述べた県警のアンケートでフィルタリング機能を入れていた中学生はわずかに9%、高校生では8%にとどまっていることだ。

出会い系サイトをきつかけとした事件は全国で2000件近く発生している。児童売春など性犯罪もあり、18歳未満の児童生徒の被害者は85%を占めた。犯罪から子どもを守るのは親の責任でもある。子どもに携帯電話を与えるのなら、ネットに潜むケータイの罠を知った上で、親子間でどんなルールを決めるのか、またはフィルタリングを設定するのかどうか、十分検討し「親権者同意書」にサインしてほしい。

ネットに潜む・ケータイの罠

中学生に携帯電話は必要か？

●普代中学校 木村利光校長

何のために中学生に携帯電話を持たせるかと考えた場合、本校では父母会の連絡網もあるし、部活での必要性も感じないし、帰りの迎いの連絡なども公衆電話を使える

頼関係でしかないのです。携帯電話を持たせるといことは必ずリスクがあります。まず、夜型の生活になります。朝も起きられず、ご飯も食べないで学校に来る例もあります。授業も集中できず、間違はなく学力は落ちてきます。

講演を聞いたあるお母さんは「モバゲーという言葉も知らなかったし、こんな実態があるなんて知りませんでした」と驚いている様子だった。同中の木村校長は「本校の場合、今の1年生が入学する時点で携帯電話を持っている子が多かったです。それに2年生、3年生が刺激され増えていきました。これまでに法外な料金を請求されたというトラブルもありました」と実情を話す。

大人の人生経験が子どもたちを罠から救う。確かにパソコンやケータイの操作に関していえば、親よりも子どもの方がはるかに知識を持っているケースは珍しくない。しかし、善悪や危険の判断では、完璧ではないにせよ、親や先生のほうに一日の長があるはずだ。

子どもをネット・トラブルから守るためには、親がこれまでの現実の世界で培ってきた善悪や危険についての判断力、対処法を、折に触れ子どもにきちんと伝えることが最も大切だ。そのためには、何かトラブルが起きたらすぐに親や先生に相談できる関係を普段から築き上げていくことが、子どもがネット・トラブルで深みにはまらないためのポイントになるだろう。

ので、私は必要性は感じていません。学校では携帯電話の持ち込みを禁止しています。しかし、持ってきている子もいて、時折指導をしています。プライバシーの問題もあり生徒一人ひとりの持ち物をチェックすることはできません。学校に持ってくるかこないかは生徒との信頼関係でしかないのです。

12月に行ったアンケートを見ると、親の携帯電話を使っているケースも多かったです。この場合は親がちゃんとチェックできるのでいいのですが、与えてしまえばそれができなくなる場合が多いのです。原則的には中学生には携帯電話は必要ないと思いますが、情報化社会に対応するため、親が子どもに貸す形をとってもいいのではないかと考えています。

これからは小中学校の保護者、教師などが一層、情報モラルに関する知識を持ち、勉強会などを定期的に開催していくことが必要になってくると考えています。